



豊橋市美術博物館友の会だより

-2016年-秋号 **Vol.96**

FU風伯HAKU
Autumn 2016

展覧会紹介

市制施行110周年・美術博物館リニューアル記念展

NIHON画 — 新たな地平を求めて —

10月29日(土)～12月11日(日) 月曜日休館



山本直彰《帰還XXI》2014(平成26)年 (画像提供=コバヤシ画廊)

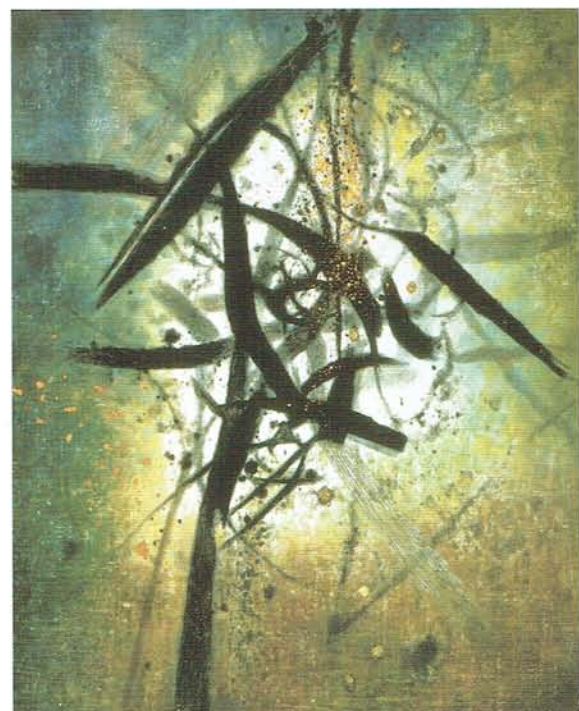
戦後まもなく、それまでの伝統的「日本画」の在り方に危機感を募らせた日本画家たちが、新たな表現を求めてさまざまな試行を重ねました。既存の美術団体では若い世代が台頭するとともに、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期す」として産声をあげた〈創造美術(現:創画会)〉が注目を集め、その一方で京都の〈パンリアル美術協会〉などが先鋭的な「日本画」表現の探究を行います。後者では膠(ニカワ)と岩絵の具をひとつの表現素材と位置づけて「日本画」あるいは絵画すら超越するかのよう革新的試みを展開しました。

本展では戦後日本画史を語る上で欠くことのできない福田平八郎、徳岡神泉、東山魁夷、高山辰雄、杉山寧、片山球子、加山又造、平山郁夫、堂本印象、横山操といった画家たちが日本画壇に新風を吹き込むべくさまざまな表

現に挑んだ1950年代～60年代を起点に、〈パンリアル美術協会〉などの前衛グループや独自に活動を展開した画家たちの実験作、伝統素材を用いてさらなる表現の探究を行い「日本画」を超える新たな可能性を示した現代作家たちを取り上げます。また、中村正義をはじめとする郷土画家の動向、新たな世代の作家を顕彰するべく1999年より当館で開催してきた「トリエンナーレ豊橋～星野真吾賞展」より三瀬夏之介ら歴代大賞受賞作家などをあらためてご紹介いたします。

戦後70年を経過し、革新者たちが挑んだ日本画の因習や伝統はすでに遠く、あらゆるジャンルや表現が混交し、「日本画」という呼称すら確たる拠り所を持たない現在、それでも「日本画」に新たな地平を切り拓いていくことは可能であるか、あらためて検証する機会となれば幸いです。

(主任学芸員 丸地加奈子)

堂本印象《交響》1961(昭和36)年
京都府立堂本印象美術館蔵

●ギャラリートーク●

11月5日(土)、20日(日)、23日(水・祝)、26日(土)

午後2時～3時(担当学芸員による会場での作品解説)

[展覧会のみどころ紹介]

1 戦後日本画の展開 - 自然・心象・抽象

福田平八郎、東山魁夷、杉山寧、片岡球子、加山又造、平山郁夫、横山操といった戦後を代表する日本画家たちが、日本画の危機が叫ばれた時代に「攻め」の姿勢で挑んだ作品を紹介いたします。

2 革新の諸相 - 表現と素材

日本画の革新を目指したパンリアル美術協会を中心に、さまざまな物質をとりこみ、絵画すら逸脱するかのような動きが1950~60年代にみられました。かつて「日本画」がここまで先鋭化したという事実に驚かされるでしょう。

3 郷土日本画家の動向

豊橋の日本画壇の動きを検証します。中村正義をはじめ、伊東隆雄、大森運夫、平川敏夫、高畑郁子、星野眞吾、森緑翠、伊東隆雄、永井繁男、それぞれに独自の画境を築いた郷土画家の代表作を新しい展示室でお楽しみください。

4 「日本画」 - “越境”の時代から

1980年代~90年代には「日本画」を軽々と越境する画家たちがあられました。もはや現代美術の領域でとらえるべき「日本画」と、それでもなお「日本画」に可能性を見出す現代の新世代の画家たち。新世代として三瀬夏之介らトリエンナーレ豊橋の受賞作家や古画をベースに現代を描く山本太郎などを紹介いたします。

新たに増築した特別展示室を公開!



久松知子《レベゼン 日本の美術「日本画家のアトリエ」》
2015(平成27)年 個人蔵

テーブルの「画家のアトリエ」を下敷きに、日本の名画や巨匠たち、そして美術評論家などの肖像を描いています。アトリエの真中にいる日本画の大家は…?



東山魁夷《樹根》
1955(昭和30)年
目黒区美術館蔵

風景画家として知られる東山魁夷には珍しく対象そのものに肉薄しています。うねるような根の動きを全面に描くことで、そこに宿る神秘的な生命力そのものをとらえています。

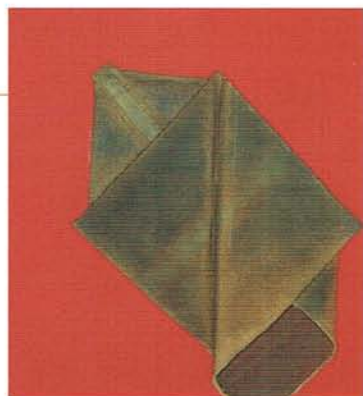


片岡球子《梅園》
1967年頃 個人蔵

はじけるようなポップな模様は、片岡球子描く梅の花。力強くユーモラスな装飾性は球子ならではの表現です。

大野俣嵩《緋No.24》
1963年
京都市美術館蔵

常識をくつがえすような試みは1960年代前後のパンリアル美術協会のコラージュ作品であられました。ドンゴロス(麻袋)の物質感と日本画顔料の鮮明な色彩の対比が強烈な印象を残します。



展覧会紹介

判じ絵の世界

10月8日(土)～11月27日(日) 月曜日休館

豊橋市二川宿本陣資料館

〈判じ絵〉とは、「絵」を判じて（解く、理解する）答えを導き出す遊び…いわゆる「なぞなぞ」の一種とされ、江戸の人々にとっては身近なものでした。

その題材は、江戸名所や日本各地の地名、東海道五十三次の宿場町、人気役者に力士、動植物に勝手道具、子どもの遊びから人々の欲望、果ては手紙の内容まで、あらゆるものが〈判じ絵〉として取り上げられました。〈判じ絵〉は、平安時代後期から行われていた言葉や文字へ新たな意味を加え考えさせる和歌と連動した「ことば遊び」が応用されたもので、時代が下った江戸時代には浮世絵版画の画題となり、多くの作品が出版されました。

その流行は、江戸に住む人々にとって浮世絵というメディアがいかに身近で手軽な存在であったかを物語るものともいえましよう。浮世絵師たちが趣向を凝らした様々な図柄の組み合わせや、そこから生まれた難問・珍問には、当時の人々の遊び心がたっぷり詰まっています。言葉を絵に置き換えて表わされたユニークな問題の数々は必見です。なかには、当時の人々は知っていて当然でも、現代を生きる私たちには馴染みのない難しい問題もありますが、ユーモアとセンスをフル稼働して、おおらかに江戸ごころを楽しんでみましょう。

本展では、判じ絵の研究者で作品を多く所蔵されている蛇足庵のコレクションを一堂にご紹介いたします。

(主任学芸員 和田 実)



判じ絵の
答え

- 問1 ● 水壺(みずかめ) / 目が水
- 問2 ● サル(ざる) / 猿(濁点)
- 問3 ● 雀(すずめ) / 鈴(目)
- 問4 ● 餅(ひらめ) / 平梳(目)
- 問5 ● 茶釜(ちやがま) / 茶を点てるカマ(ガエル)
- 問6 ● 箱根(はこね) / 歯と逆さまの猫
- 問7 ● 雑巾(そうじん) / 象と金太郎の上半身
- 問8 ● カマキリ(かまきり) / 釜を切る

申年から酉年 干支と新春の遊び展

12月10日(土)～平成29年1月15日(日)

月曜日、12月29日(木)～1月1日(日・祝)は休館(ただし、1月2日(月)、3日(火)、9日(月・祝)は開館し、10日(火)は休館)

豊橋市二川宿本陣資料館

かつて唱歌にも歌われた子どもたちに人気の正月遊びといえば、凧揚げ、独楽回し、まりつき、羽根つき。さらにカルタとりや双六も人気がありました。

ところが最近では、外で凧揚げや独楽回しができる場所が少なくなり、また、各種ゲームの普及などから子どもたちが外で遊ばなくなり、これら正月の風物詩を目にする機会も少なくなりました。

この展覧会では、豊橋市美術博物館所蔵の大口コレクションなどから郷土玩具を、あわせて当館所蔵の双六などを展示し、干支や季節にちなんだ郷土玩具と新

春の遊びについて紹介します。

また今回は、豊橋竹とんぼ会を創設し、郷土玩具の収集、研究に尽力した故竹尾藤市氏のコレクション(当館所蔵)もあわせて展示します。(主任学芸員 高橋洋充)



《参宮上京道中一覽雙六》

◆関連イベント「いいとこ発見!とよはしカルタ」大会の開催

参加者には「いいとこ発見!とよはしカルタ」をプレゼント

日時/平成29年1月7日(土) 午後2時～4時

会場/当館講義室

協力/豊橋発見カルタの会

申込/12月6日(火)9:30から電話で先着。小学生以上。定員30名。

(二川宿本陣資料館 ☎0532-41-8580)

くにざかい 市制施行110周年記念 「普門寺と国境のほとけ展」

平成29年1月21日(土)～2月26日(日)

豊橋市美術博物館 2階展示室 月曜日休館

豊橋市と静岡県湖西市との境は、三河国と遠江国の国境です。平安・鎌倉時代に、ここですぐれた仏教文化が花開いたことを、みなさんをご存知でしょうか?

紅葉の名所として知られている普門寺は、その仏教文化の中心的な役割を担った山寺でした。普門寺の裏山である船形山には、元堂址と元々堂址と呼ばれる2つの本堂跡を中心に、250か所を越える平場群、中世墓群、経塚、巨岩、池など各種の山寺遺構が、じつに33万平方メートル(ナゴヤドームの敷地3つ分)にわたって展開しています。東海地方最大の山寺遺構として、豊橋市文化財センターが10年以上にわたる考古学調査を行い、その全貌が明らかになりました。

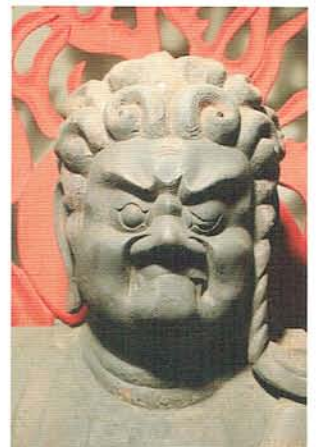
また調査は考古学だけでなく文献、彫刻、建造物な

ど多岐にわたります。文献調査では平安時代にさかのぼる木製の古文書(木札)が新たに見つかり、約900年前の普門寺の規律が明らかになりました。彫刻調査では、国境地域に分布する平安・鎌倉時代のすぐれた仏像彫刻を見出し、その評価をさらに進めました。

今回の展覧会は、普門寺を含む三遠国境地帯の山寺調査の成果を紹介するものです。国境地帯は、当時の人々にとって縁の遠い山奥ではなく、多くの僧たちが山中で活躍し、また平地の民衆と深い関わりを結んだところでした。

平安・鎌倉時代の人々が魅せられた国境地帯のロマンを、みなさんも感じてみませんか。

(主任学芸員 岩原剛)



《木造不動明王立像》
平安時代末



《僧永意起請木札》永暦2年(1161)

友から友へ

会員みなさんに美術との関わりについてご寄稿いただきました。

いちごと私と美術館

吉葉けい子 (558)



子供の頃の私は、絵は特に興味はありませんでしたが、結婚してから主人は絵が好きで良く描いていた事を知り、同じ趣味を持ってたらいいな～と思っていました。

豊橋のNHK文化センターに、色えんぴつで描く講座が出来る事を友人から聞きすぐ申し込みました。絵を描く事に出合い趣味を持つ事が出来ました。ある日、孫がいちご狩りのおみやげにいちごを持って来てくれました。そのいちごが私に早く描いてと言っている様に感じ、すぐ描き始めました。講師の熊谷曜志先生に見て頂き「赤い額に入れて飾ったらいいよ」と言われたその時の感激は今でも忘れません。

もっと大きな絵が描きたいと思う様になり、

水彩画教室に通っている友人に宮城照己先生を紹介して頂きました。水彩画を始めてから、今までの私とは違う自分を発見し、色々な事に興味を持ち、人の輪も広がっています。宮城先生は、感性をみがき個性的な表現が出来る様に指導して下さいています。

美術博物館が近い事もあり良く出かけて行きます。最初に感動した絵は、星野真吾さんの廊下に落ちている画鋏の絵でした。その頃は友の会がある事も知りませんでした。その後入会し、ハローキティ展を始めワイエス展等々色々と拝見し、そのたびに感動で胸が高鳴りました。展覧会、講演、ギャラリートーク後にもう一度絵を拝見すると前より身近に感じる事が出来ました。大勢の人に出会う事も多くなり、絵を描く楽しみも日増しに強まっています。これからも楽しみにしています。

みんなで作る展覧会

本多和慶 (3008)



子供の頃の私は体が弱く、絵を描くようになったのも自然の成り行きだったのかも知れない。絵が好きだったから美術博物館友の会に入り同じ

ような仲間との出会いを夢見ていたのかも知れない。でも、現実にはほとんどあり得なく、旅行やコンサートでのわずかな時間にお互いを意識するに留まる。

いつも思うのだが友の会は特定な人のため、美術館寄りの人のためとの気がする。実際それで良いのだが、友の会会員の中には取り残された感じを受ける人もいるようだ。全ての会員が話し合い、楽しめるイベントがあったら大きな

振動となって拡がるのに時間はかからないだろう。友の会会員はそれぞれレベルの差はあるだろうが、芸術美術には大きな関心を持っておられると思う。あるいは、少しは手持ちの作品が有る方もいると思う。

そこで美術博物館友の会で「会員コレクション展」の開催はいかがでしょうか。なるべく全員が思い思いの作品を出品する。無名な芸術家の素敵な作品や、埋もれていた大家の作品が出てくるかも知れない。題名の側に「作品の気に入ったところ」「作品を手に入れたいきさつ」など書いていただく。会員同士が展覧会場で会話が始まり友達が増えていく。そういう雰囲気友の会になる事を期待しています。

「市制施行110周年記念 放浪の天才画家・山下清展」開催に合わせ、友の会主催によるコンサートと、貼り絵ワークショップを開催しました。

●篠笛コンサート

9月23日の午後6時より、山下清展を盛り上げるため、友の会主催イベント「秋の夜長の山下清～篠笛を聞きながら」を開催し、会員と一般来場者ら約80人は、篠笛のみやびな音色で秋の夜長のひとときを楽しみました。

当日は、鳳来寺参道の古民家を改装した「結」を拠点に、新城市内の各所で笛の催し「笛の盆」などを展開する篠笛奏者の松田仁さんと夫人により、オリジナル曲「天馬」や「設楽幻想」ほか「荒城の月」など5曲を演奏しました。

カフェレストランでは、山下清の作品《長岡の花火》をイメージした特別料理も用意され、演奏会の後、足を運んだ方もいらっしゃいました。



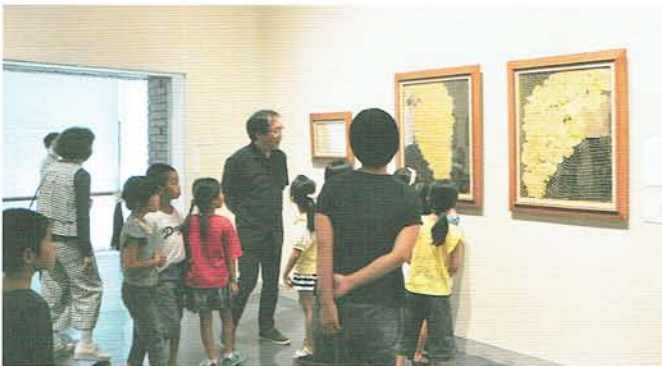
●貼り絵ワークショップに挑戦

10月2日、友の会主催のワークショップ「はり絵だ！顔だ！」が催されました。日本画家の鈴木敬三先生に教わりながら、参加者23名が紙皿に顔を描く貼り絵に挑戦しました。

参加した小学生らは、最初に鈴木先生と「山下清展」を見学しました。清の自画像を見ながら「作品の顔の色は一色でないよね。みんなも紙の色はよく考えて選んで」という先生の説明に、熱心に耳を傾けていました。

教室に戻ってから、実際に貼り絵の制作に取りかかりました。鈴木先生の指導を受けながら、紙皿に鉛筆でまず、大きく顔を描きました。それからチラシや雑誌などから貼る紙を選び出し、小さくちぎって筆で糊を付け、皿に貼っていきます。最後に皿の縁にも紙で飾りを付けて完成させました。笑顔の素敵な顔、迫力満点の顔、愛嬌いっぱいの顔など、思い思いの顔ができて上がりました。

参加者たちの作品は「山下清展」の会場に展示され、通りかかった人は、細部まで丁寧に仕上げられた力作の数々に見入っていました。



山下清展を見学



先生に教わりながら貼り絵を制作

カフェレストラン「ポールドール」がオープンしました!

春より改装のためお休みしていましたが、9月22日の山下清展オープンに合わせ、カフェレストラン「ポールドール」が新しくオープンしました。

ポールドールは、フランス語で Port d' Art = 「芸術の港」を意味します。美術博物館を港にたとえ、芸術の都であり、芸術の集積地として栄えるようにとの願いが込められています。営業時間およびメニューが拡大し、8:00～モーニング、11:30～ランチ、そしてスイーツがあり、閉店は17:00(オーダーストップは16:30)です。美術鑑賞の前後に、ポールドールでのひと時はいかがでしょうか。豊橋公園の木々が色づくこれからの季節には、テラス席もお勧めです。企画展の内容と連動したメニューも続々と登場予定。期待しましょう。



佐渡冥界の譜

大森運夫 ● KAZUO Ōmori

1973(昭和48)年 紙本着彩・箔 179.0×480.0cm 第37回新制作展出品



大森運夫は、八名郡三上村（現豊川市三上町）に生まれました。豊川市立南部中学校の国語教師を務めていた1950年、中村正義との出会いによって大きく運命が動きだします。当時正義は、若くして日展で特選を受賞し、評価が高まっていた時期でした。正義の勧めにより、新制作展、日展に出品して初入選を果たし、その翌年、正義・平川敏夫・星野眞吾・高畑郁子と「中日美術教室」を主宰。これら同世代の若い仲間たちと切磋琢磨することにより、次第に画家としてたつ決意を固めます。山谷に取材し社会問題をテーマとした《ふきだまりII》(1962)、漁師・海女をテーマとした《九十九里浜》(1966)、中世ロマネスク美術に共鳴した作品などを経て、民衆の祭をモチーフとした作品を手掛けるようになりました。本作は、そうした1点です。

佐渡には、鬼太鼓（おんでこ）と呼ばれる伝統芸能があります。大森は現地に赴いて取材を行い、佐渡金山の

ひとつ、相川金銀山で若くして亡くなった名もない坑夫たちを供養する儀式に遭遇しました。勇壮な躍動感を見せる鬼や獅子の姿と、悲しみに暮れる工人たちの対比的な姿は本作の見どころであり、大画面の金箔が迫力を持って訴えかけます。

9月29日に、大森運夫さんが99歳でご逝去されました。

1967年からは、三河を離れ関東へと移られましたが、折にふれ豊橋市などでの個展のご案内をいただき、当館においては、個展、常設展、2012年の「平川敏夫と大森運夫展」などで紹介して参りました。

本作をはじめ、素晴らしい作品を残して下さいたことに感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(学芸員 細田樹里)

◆NIHON画—新たなる地平を求めて—にて公開中

編集後記

今号の表紙はいかがでしたか？

表紙は毎号、催しに関連した作品の中から最終的に、編集長が悩みつつ、楽しみつつ決めていきます。前号のアンケートの中で「表紙が良かった」という声をいただいたのは嬉しい限りです。

今のところアンケートの回答は少数ですが、多くの方が回答や感想を寄せて下さると励みになります。皆さまのお声をお待ちしています。

この号では、美術を生活の一部として魅力的に活動されている会員の方の中から、お二人に原稿をお願いしました。

『風伯』を、より身近に楽しく興味を持って読んでいただけるような誌面づくりを目指しています。

会員の皆さまのご参加、ご協力をお願いします。

(鈴木冷子)

【表紙作品】

上田臥牛《裸木》1966年 紙本着彩 162.0×130.5cm
東京国立近代美術館蔵

◆NIHON画—新たなる地平を求めて—にて公開中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第96号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会
会 長 宮田正人
編 集 長 高須博久(副会長)
編 集 委 員 鈴木冷子 神野志保子 河邊満江 富田真知子
藤本逸子 清水貴裕
協 力 豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882
平成28年10月30日発行